

# 地域の諸問題解決のために貢献する生徒会活動

野村 泰介 (山陽女子中学・高等学校)

## 1. はじめに

学校法人山陽学園は、幼稚園、中学校、高等学校、短期大学、大学を有する総合学園である。その中で山陽女子中学校・高等学校は1886年創立の山陽英和女学校を母体とした現在の岡山市中区門田屋敷で女子教育を行っている。現在、中学校では「特別進学コース」「総合コース」の2コース、高等学校では普通科「スーパー特別進学コース」「エクセルコース」「総合進学コース」、「musicコース」の4コースで構成されている。創立以来、学園の精神として掲げているのが「愛と奉仕、感謝」。この言葉を具現化するための教育が古くから行われている。

平成25年4月より完全実施される新学習指導要領における「特別活動」では生徒会活動の中に「ボランティア活動などの社会参画」が重要視されている。本校の持つ学園の精神と、新学習指導要領が求める事項には多くの共通項が見られる。当研究では「愛と奉仕、感謝」の精神という学園の持つ土壌の上に、新学習指導要領が求める生徒の社会参画の在り方について、特に「地域の大人や社会とのかかわりを深める」活動に重点をあて実践を行った。実践は、1. 調査・研究、2. 行動、3. 支援、4. フィードバック、の流れで行い、それぞれの成果を得ることができた。1. 調査・研究では、新しい社会貢献のモデルの調査を、2. 行動では、「地域社会とつながる」イベントの企画・運営を、3. 支援では、地域を豊かにする団体への寄付などを、4. フィードバックでは、活動の成果を動画やブログなどで報告した。詳細は以下の通り、4月から10か月間に渡る研究実践の成果を報告し、ご一読いただきたい。

## 2. 地域との関わり方と「みんなつく財団」

本校において生徒会組織における「社会貢献活動」の事例は比較的多くある。特に募金活動や校外に出るボランティア活動はかなり活発に行っているが、毎年定例で行う事業が多く(注1)、事業実施が目的化してしまっていることは否めない。そのような中で、私は生徒が社会貢献活動を行う意義を今一度考え、実際に動き、その成果が目に見える形で残ることはできないだろうかと考えた。

2012年9月、地域の社会課題解決を自分たちの手で実現するための「あたらしいインフラづくり」を目指す一般財団法人「みんなでつくる財団おかやま」(以下、みんなつく財団)(注2)が設立された。みんなつく財団は、地域の社会課題が抱える、1. 行政だけではカバーできない、2. NPOの慢性的資金難、3. 限られた人のみの社会参画 という3つの問題の解決を図る新しい形のコミュニティ財団である。みんなつく財団が抱える「つなぐ、伝える、シェアをする」という言葉は、地域のあらゆる主体が公益を担い合う社会を目指し、安心して持続可能な地域社会の実現を目指し活動している。その理念の実現のため、みんなつく財団では高校生を含む、若い世代への活動参加の呼びかけを行っている。

一方、学校現場の中で、日々の学習活動の中、社会貢献活動に割く時間や機会が少なく、従来からの限られた範囲内での活動にとどまるという現状があった。「何かしたい」と思っている生徒は多くいるのだが、その欲求を満たす場と時間をなかなか提供することができていなかった。

そのような中で、私は、みんつく財団の理念が、学校教育現場と地域社会をつなぐ媒体としてマッチする可能性が高いと判断し、本校生徒との協同事業を模索した。活動主体の生徒は、従来から地域との関わりを比較的持っていた放送部や編集部(注3)に声をかけることにした。みんつく財団との協同事業は4月から9月までを前期、後述する「SGSG」が活動主体となった10月から2月までを後期とに分けることができる。以下、具体的実践例を前期と後期に分けて記述する。

### 3. 放送部・編集部による「みんつく財団」との協同事業（前期）



山陽学園ブックトレード(2013年5月)

2013年5月から7月にかけて、放送部はみんつく財団に関連する映像制作を行った。映像制作にあたり、みんつく財団職員の方を講師に勉強会を行った。この勉強会は生徒たちが「なぜこの活動に取り組むのか」を考える上で有意義なものとなった。勉強会は、生徒がみんつく財団事務所を訪問する形で、4月から6月の間に4回行われた。制作した映像は全部で3種類。4月に制作した「事業指定寄付募集」PR映像は、みんつく財団が主催するチャリティイベントで上映され、寄付募集の一助となった。6月には、みんつく財団そのものを多くの

人に知ってもらうための「みんつく財団 30秒CM」、7月には約8分間のテレビドキュメント番組「みんつく」を制作し、いずれもweb上で公開した。(注4)

編集部では2013年5月、地域と学校を本でつなぐ「山陽学園ブックトレード」を開催した。学校周辺の住民を中心に、約50名の参加が見られた。本の交換イベントと同時に、みんつく財団の活動紹介パンフレット配布を行った。ブックトレード実施後、みんつく財団の事務所に寄付の問い合わせが来るなど、一定の成果が見られたイベントとなった。その後、6月にJR岡山駅前広場で行われたイベントでみんつく財団活動紹介ブースの補助を行った。

### 4. 「SGSG」の結成（「みんつく財団」との協同事業（後期）1）

2013年10月、放送部メンバーの中から、より主体的にみんつく財団との協同事業を進めていきたいという生徒が現れ、その生徒をリーダーに新たな任意グループが誕生した。参加メンバーは、リーダーが有志メンバーを集め、5名でスタートさせた。私はこの任意グループの世話役を務めることにした。世話役として、その生徒たちの「やりたいこと」の実現を助け、「やりたいこと」が社会に貢献できるように社会とつなぐことを役割と捉えることにした。

この会は、生徒たちの自主活動がソーシャルグッドになるような流れを作っていきたいという願いを込め、「SGSG（山陽ガールズ・ソーシャルグッド）」と名付けた。SGSGを発足させるにあたり、団体PR文「山陽(S)ガールズ(G)ソーシャル(S)グッド(G)の略。授業・部活・生徒会などの枠を超えて岡山という地域に良いアクションを起こす有志集団です。岡山を良くする志を持つ団体とのコラボレーションにより、地域の未来を創造します。」という団体PR文を作成した。その後、SGSG最初の組織的活動は後述する「切手で岡山を元気にしようプロジェクト」に決定した。使用済切手を集めてそれを換金し、岡山のために活動する団体に寄付しようという試みである。

### 5. 独自の古切手回収・換金システムの構築

使用済切手を集めるボランティア活動は古くから存在する。一般的に集めた切手は、取りまとめをして

いる団体に寄贈し、その団体が換金し、団体の活動資金となっている。使用済切手を集め、換金している団体は日本各地にあるが、の中で最も規模の大きい団体が、公益社団法人日本キリスト教会海外医療協力会（略称 JOCS）である。JOCS は 1960 年、アジアやアフリカでの海外医療活動支援のために発足した。活動資金を得るために、使用済切手運動を展開している。JOCS では年間 18 万件の使用済切手の寄付を受け、その換金額は約 1600 万円にのぼる。全国各地から集まった使用済切手を整理し、1 箱 7.5 キロ（約 5 万 2500 枚）に箱詰めされる。この箱はキロボックスと呼ばれ、1 箱あたり 12000 円で販売されている。切手収集家はキロボックスを購入し、宝探し感覚で望みの切手を探していく。JOCS によると、キロボックスは大変



回収した使用済切手

な人で、現在、供給が需要に追いついておらず、慢性的に切手不足の状態、注文してから 1 か月以上発送できないこともあるという。

SGSG では、このことに目をつけ、自分たちで切手を集め、自分たちの手で換金し、みんつく財団へ寄付する独自のシステムを構築することにした。切手回収を呼び掛けるチラシを作成、イベント会場での配布や県内企業への送付を行った。

同時に、地元新聞社に取材を依頼し、紙面で切手回収の呼びかけを行った。（注 5）順調に切手は集まり、回収した切手は

2014 年 1 月現在、40 件で約 20 キロ、1 箱 10 キロのキロボックスを作成した。そのうち 1 箱を SGSG の活動を新聞で知ったという岡山市内の収集家に販売した。

## 6. 自動募金箱「がっちゃん」の開発（「みんつく財団」との協同事業（後期） 2）

**山陽女子高生でつくる「SGSG」製作**

### 海外の切手でしおり

しおりを作った SGSG のメンバー

**あすから 収益寄付し 社会貢献**

SGSG は、山陽女子高生（S、G、S、G）が、市から集めた海外の切手を使い、オリジナルのしおりに取り組み、10月1日から自動販売機で販売し、収益を県内の社会福祉団体に贈る。

山陽女子高 岡山市中區田原の生徒らでつくるボランティア団体「SGSG」が、市から集めた海外の切手を使い、オリジナルのしおりに取り組み、10月1日から自動販売機で販売し、収益を県内の社会福祉団体に贈る。

SGSG は、山陽女子高生（S、G、S、G）が、市から集めた海外の切手を使い、オリジナルのしおりに取り組み、10月1日から自動販売機で販売し、収益を県内の社会福祉団体に贈る。

押しつけて簡単にし、1枚200円（全工作本）と同じ図柄のしおりは二つないという。

自動販売機は毎月1日、岡山市区外の県立ボランティアセンターの入り口付近に設置し、岡市のNPO法人「みんつく財団」が運営する。SGSGのメンバーは、毎月10日、しおりを回収し、みんつく財団へ寄付する。しおりは、100枚を1箱として、みんつく財団へ寄付する。

**「がっちゃん」を紹介した新聞記事**  
山陽新聞 2013. 11. 30

使用済切手回収を行う中、キロボックスに入れるには不十分な外国切手（キロボックス購入者の目的は日本切手のため）の寄贈を受けるようになった。それらの切手を効果的に活用するために、外国切手を使った雑貨（切手しおり）を作製、募金していただいた方へのお礼として配布することにした。しかし、授業時間外を使う SGSG メンバーの活動だけでは十分な募金活動ができない。そこで、シールやカードを販売する自動販売機を利用した「自動募金箱」を開発し、SGSG メンバー不在時でも募金活動が可能にした。中古の自動販売機を入手後、筐体を募金箱風に改装、中に、外国切手を使ったしおりをセットした。このスタンスはしおりを販売するのではなく、募金のお礼にプレゼントするというもの。自動販売機を募金箱にしまおうというユニークな発想である。

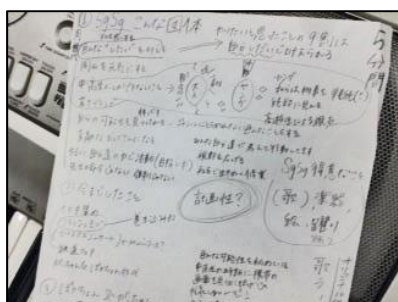
自動募金箱に親んでもらおうと、募金箱の名前を「がっちゃん」と命名、合わせて SGSG オリジナルキャラクター「ぼかちゃん」をデザインし、SGSG の活動を紹介するカード

を作成した。「ぼかちゃん」カードは切手しおりといっしょに募金のお礼として「がっちゃん」にセットし、配布した。

自動募金箱「がっちゃん」は、みんつく財団事務所に設置され、みんつく財団主催のソーシャルイベント時には会場に持ち込まれ、多くの人の目に触れることになった。この新しい募金システムは注目を集め、地元新聞に大きく取り上げられた。(注6)

SGSG 活動のフィードバックとして、インターネット上で活動報告を行っている。(注7)また、使用済切手を寄贈していただいた方には御礼状を送付している。また、3月には、使用済切手換金分と、自動募金箱「がっちゃん」に入れられた現金を、みんつく財団へ寄付する予定である。

## 7. SGSG 今後の展開ー任意団体から公認団体へ



SGSG ミーティングメモ

高校生にとって「地域の諸問題解決」という言葉は時としても重いものとなる。その重さに押しつぶされモチベーションが低くなる恐れも十分に考えられる。また、一部の「意識の高い生徒」だけが活動できる場であっても長続きしない。

現在、SGSG メンバーは週1度、定例ミーティングを行っている。このミーティングでは「自分たちのやりたいことを、どうやって社会貢献に結び付けるか。」に多くの時間をかけている。生徒が自主的に継続的に動くための原動力は活動する生徒自身の「やりたい」という欲求である。高校生のエネルギーが社会を良い方向に巻き込め、それがす

なわちSGSGの考えるソーシャルグッドの在り方である。1年に渡る当研究の過程で教員のかじ取りにより、当初は個別の部活動であったが、SGSGという生徒たちの任意団体が発足した。SGSGメンバーは、次年度以降、この活動を継続させていくために、生徒会活動の一環としての「学校公認団体」になるべく準備中である。

生徒たちのミーティングノートには生き生きとした文字で「やりたいこと」が並べられている。地域振興、人権問題、観光支援などテーマは雑多で多岐にわたっているが、彼女たちの荒削りな「やりたい」をソーシャルグッドな活動に昇華させるべく、今後も支援していきたい。

注1 生徒会における定例で行う「社会貢献活動」

4月「緑の募金」7月「夏のボランティア」12月「NHK街頭募金」「年末献金」

注2 一般財団法人みんなで作る財団おかやま(岡山市北区)代表理事 石田篤史 基本財産 413万円  
URL:<http://mintuku.jp/>

注3 いずれも生徒会傘下の部活動。放送部はドキュメント番組制作を通じて様々な社会問題の取材を行っている。また、編集部は学校新聞発行の他、様々なイベントを企画し、「社会とのつながり」を意識した活動を行っている。

注4 事業指定寄付映像は公開終了。

みんつく財団30秒CMは公開終了

「みんつく」<http://www.youtube.com/watch?v=c7eVTyC5u8Q>

注5 山陽新聞2013年10月9日「山陽女子高 SGSG」

注6 山陽新聞2013年11月30日「海外の切手でしおり」

注7 SGSG ブログ <http://sgsg1.jugem.jp/>